

青蓮院吉水蔵慈円関係聖教について（上）

阿部 泰郎
菊地 大樹

一 吉水蔵の慈円著作聖教研究略史

青蓮院門跡は、初代行玄大僧正（一〇九七—一一五五）の草創になり三味流の本所として鳥羽院の帰依を受け、七宮寛快法親王が継承し、宮門跡として山門に梶井門跡と並ぶ権威を得た。第三代として撰関家藤原忠通の息道快改め慈円（一一五五—一二二五）は九条兼実の同母弟として信頼篤く、法流を全玄や晴暹、そして観性から稟けると共に建久三年、三十六歳で天台座主に昇り、建久七年に退いて以降三度還任し、まさしく「我立つ柚」の主となった。後鳥羽院の信任を蒙り、和歌の道においても新古今歌壇の中心にあり、かつ『愚管抄』の名を匿した著者でもあった。その生涯は叡山の興隆に尽力しながら、同時に青蓮院と大壇越である九条撰関家の繁栄に心を砕いたのであった。

青蓮院吉水蔵には、日本天台密教の原典というべき慈覚大師円仁以来歴代の名匠の聖教が伝えられ、それら累積する谷流の諸法流聖教の裡には、慈円の手づから写し伝えた、或いは自ら著した多数の聖教記録等が含まれている。例えば蔵中に多く伝わる平安期の儀軌類のうち多くに、慈円が嗣法と定めた後鳥羽院七宮道覚親王が師より親しく伝受した旨の識語を記している。その一方で、これまで知られている慈円その人の

自筆になる写本は極めて僅かである。自伝草案（土台）と言うべき『仏子一期思惟』断簡一卷と晩年貞応三年に草した『聖徳太子・十禪師告文』⁽²⁾一卷が重要文化財に指定されている。また、転写本であるが、多賀宗隼により、『本尊縁起』一帖が紹介されている。⁽³⁾

多賀は、『慈円全集』（一九四五年）を始めとして、慈円研究を持続し、その著作についても主な編著書毎に一覧を掲げ、その内容を詳説する。⁽⁴⁾ それらに言及された吉水蔵中の聖教著作については、天台宗典編纂所が三崎良周を中心に解説と校訂を重ねて、『續天台宗全書』密教2・3に『蘇悉地経問答』一卷、『秘経抄（毗盧遮那別行経抄）』一卷、『 ㊀ 』（毗逝）^別『二冊』、『法花』^{別帖}一冊が収録され、更に慈円口決・慈賢問書『四帖秘決』四帖が収められた。⁽⁵⁾ これにより慈円の主な密教著作が一挙に知られることになり、また正治から建保年間にかけての慈円の活動期における口説言談記録が参照されることとなった。『 ㊀ 』（毗逝）^{別上}末には、嘗て赤松俊秀が紹介した建仁三年の「夢想記」が含まれ、その宗教的な思惟の文脈を知ることができる。以降、慈円の宗教著作の紹介については、三千院円融蔵に伝来する『六道釈』一卷（承久四年）の紹介の他に大きな進展はなかった。

青蓮院吉水蔵は、重要文化財指定事業の一環として吉水蔵聖教調査団

による目録が作成され、『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』（以下、同書を「目録」と称す⁸）として詳細な解説と索引を付して公刊された。そこに、中核となる勅封の伝統により秘された「二九一箱」を除いた百十七箱と木箱四合の全点の書誌情報が公開された。これを檢ずれば、既に全文が翻印された先の四点以外にも、更に多くの慈円による著作ないし伝受書写された聖教等が含まれていることを、その奥書識語等によつて推察することができる。先の調査団には東京大学史料編纂所も参加し、マイクロフィルム撮影も担い、ほぼ全点に亘る撮影が行われた。このマイクロフィルムは史料編纂所において閲覧が可能であるが、主として設備の制約などにより、その記載内容を詳細に確認することは事実上困難であった。

近年、史料編纂所では所蔵マイクロフィルムのデジタル化とそのCAT画像閲覧システムによる閲覧が可能となったことにより、筆者（阿部）はこのシステムを利用して吉水藏聖教の確認と、『目録』の記載を手がかりに画像による解説を試みた。その結果は、後に一覧表を掲げる慈円関係聖教著作の（一部推定を含めた）大量の出現であり、更には、『目録』の情報だけでは検出できず、画像上の読解によつて始めて確認された慈円著作の発見である。以下、筆者による、長期にわたる確認・解説作業の成果を整理して中間的な報告を行いたい。

なお本稿と関連して、一覧表に示した著作のうち主要なものについての検討・問題を主な内容とする続稿を予定している。本稿および稿末に収録した「吉水藏慈円関係聖教一覧」の作成はおもに阿部が担当し、続稿のうち『法華別帖』ほか、慈円の法華法およびその相承にかかわる文献についての検討はおもに菊地が担当したうえで、相互に内容を確認した。また、調査から成稿までの各段階において、阿部美香の協力を得た。

二 吉水藏における慈円聖教——真実二合の「御皮子」

多賀宗準による慈円研究の一環として、青蓮院における法流聖教の形成と伝来に関する考察「二九一箱」青蓮院藏⁹には、「青蓮院門流事」（叡山文庫南溪藏）等の資料を挙げて、その来歴を考証し、その中で、同書により次のような慈円の聖教についての言及を引く。

和尚（慈円）之御抄二合有之、名¹真実皮子、真²皮子、一向御自抄、実³皮子、少々旧⁴書被⁵加⁶之、

そこに慈円の「御抄」として真実二合の「皮子（皮籠）」に収めた聖教の存在が示される。これは、多賀が続けて掲げ、また『目録』の山本信吉の解説にも述べるところだが、慈円が道覚親王への讓状を承久乱後に改めて良快に与えた讓状の中の、「当流聖教事」の「秘書」末尾に自らの聖教を加えた一条にも見えるものである。そこに「余隨身皮子四合」と示し、その下に「^{常左常右}二合^{真実}」と割注で示し、更にその下に「^{灌森}真」¹⁰と添える。おそらく慈円が常住に自身の座左右に携えていた、自抄や相伝の重書を収めていた皮子であったと推定される。山本の解説では、更に吉水藏中にこれに相当する「実御皮子本」および「真御皮子」による写本の存在を紹介する。その如く、吉水藏には、奥書識語に「慈鎮（和尚）御筆本」として傍に小さく「実」と注し、または「実御皮子本」として「慈鎮御筆」と注す聖教が散見し、これらを聚めると次頁に掲げた「吉水藏聖教の慈円関係聖教」「慈鎮御筆本」「実御皮子本」一覧¹¹のように三十三点を数える。その中には延応二年（一二四〇）四月と六月に、成源が書写したことを伝える識語が含まれる。これらは僅かな例外を除けば、何れも比較的短篇の諸尊法次第で占められ、その中に特に慈円が記述を加えたような文言は見えない。

◎吉水藏聖教の慈円関係聖教「慈鎮御筆本」「実御皮子本」一覧

函号	外題	数量	内題・表紙端題・奥書識語（丁数）
30 4	炎魔天	一帖	〔内題〕炎广天供法施事 〔以慈鎮之御筆本 ^{実筆} 〕（8丁）
30 14	阿闍梨御伝授目録	一帖	〔以慈鎮之御筆本 ^{実筆} 書了〕（8丁）
30 17	行法私記	一帖	〔延応二四七、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了、成源〕（4丁）
46 6	胎藏	一帖	〔延応二四四月四日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了、成源〕（10丁）
46 7	胎藏	一帖	〔延応二四四月四日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了、成源〕（14丁）
46 8	金剛	一帖	〔延応二四四月四日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了、成源〕（4丁）
57 5	曼陀羅供之事 ^{古実等可解之}	一帖	〔嘉禎三十一廿八、於飯室、故僧正御房御筆本書了、成源、/実ノ御皮子本 ^{云々} 〕（6丁）
60 4	加行事	一冊	〔延応二一六月十三日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了〕「交了」〔3丁）
62 1	不動 ^{八十枚焼作法}	一帖	〔延応二一六月廿二日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了、交了〕（7丁）
62 7	護摩 ^{經律寺私}	一帖	〔建保四年八月廿七日戊尅、於龍口殿北一対東妻隔屋、挑燈燭書了之了、妙香院僧正御房本也、進経〕「同廿八日夜朱点了」 〔此口決、実皮子中正本有之、先師真筆也、仍入加書写本者也、故宮御判也（花押）記〕 〔建長五年三月十三日、於白川房数人書了、手自校合了、無品尊助親王〕（33丁）
67 15	七佛薬師 ^{付一佛}	一帖	〔端題〕結縁事「以慈鎮御筆本 ^{実筆} 書了」〔8丁）
69 6	法記等	一帖	〔延応二一四月七日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了、成源〕（4丁）
70 3	金輪	一冊	〔以実御皮子本 ^{御筆} 書了〕（4丁）
70 6	光明真言	一帖	〔端題〕光明真言 ^{慈鎮和尚筆} 〔以慈鎮御筆本 ^{実筆} 書了〕（4丁）
72 10	法華軌	一冊	〔表紙端書〕実「慈鎮、御筆本 ^{実筆} 書了」
72 18	密説	一冊	〔包紙表書〕法花供 ^{慈鎮御筆本^{実筆}云々} 〔以慈鎮御筆本 ^{実筆} 書了〕（7丁）
75 5	佛眼	一冊	〔以実御皮子本 ^{御筆} 書了、交了〕（5丁）
75 15	尊勝	一冊	〔内題〕尊勝根本印事 〔以実御皮子本 ^{御筆} 書了〕（5丁）
76 5	五字文殊	一冊	〔延応二年六月廿日、以実御皮子本 ^{慈鎮和尚筆} 書了〕「交了」〔6丁）

77 15	普賢延命	一帖	「以慈鎮御筆本 ^{実書了} 」(4丁)
79 7	不動七支次第	一帖	「延応二一六月廿六日、以実御皮子本 ^{慈鎮書了} 」(8丁)
80 2	不動	一帖	(内題) 不動 <small>覺不語心狀等抄次第ヲ</small> 〔本奥書〕「寿永二年十二月六日、於無動寺證明院抄之了」 〔延応二一六月廿二日、以実御皮子本書了、交了、 ^{慈鎮御筆也} 〕 〔密々者、已下、本 ^ニ 折紙 ^ニ 被具タリ、本端三枚下サケ破損、仍文字少々不見之間、不書之〕(16丁)
80 3	神供	一帖	(内題) 神供事 (外題下) ^{覺大師門人} 「以慈鎮之御筆本 ^{実書了} 」(4丁)
81 18 (5)	(烏芻沙摩)	一冊 (前欠)	「以実御皮子本 ^{御筆書了、交了} 」(存3丁)
84 10	毗沙門行法	一帖	(外題) 毗沙門 「以慈鎮之御筆本 ^{実書了} 」(3丁)
91 5	私 ^{御説集}	一帖	(表紙付箋) 実 「延応二一四月八日、以実御皮子本書之、本 ^ハ 三半紙唐閑雙紙也 ^{御云} ／三昧阿闍梨手跡 ^{云々} 、又表紙上 ^ニ 持明金剛 ^{云々} 」(4丁)
91 6	諸尊集	一冊	「延応二一六月十一日、於法雲房、以実御皮子本令書了、同十三日交了、／慈鎮御筆大峯御房御筆相交」(18丁)
93 2	大威徳法等	一帖	(内題) 愛染王 (中) 冥道供 (大威徳末) 「以慈鎮之御筆本 ^{実書了} 」 (冥道供末) 「以実御皮子本 ^{慈鎮御筆書了、成源} 」(6丁)
93 4	名目等読様	一帖	(表紙中央) 雑抄 「以慈鎮之御筆本 ^{実書了} 」(4丁)
93 5	行法之間事	一帖	「以慈鎮御筆本 ^{実書了} 」(8丁)
104 4	雜記	一帖	「延応二一六 十三、以実御皮子本 ^{慈鎮書了、交了} 」(5丁)
木箱1 23	鎮壇	一帖	(内題) 鎮壇事 「以慈鎮御筆本 ^{実書了} 」(4丁)
木箱2 21	白衣	一帖	「以慈鎮和尚御筆本 ^{実書了} 」(4丁)

この「実御皮子本」の来歴は、延応より早く嘉禎三年(一二三三)に同じく成源が写した57-5『曼陀羅供事』の書写識語に、「於飯室以故僧正御房御筆本」「実、御皮子本^{云々}」とあり、道覚に代わり慈円の遺跡を継承した九条家出身(兼実息)の妙香院僧正良快の許にあった「故僧正」

すなわち慈円の御筆本を写したものであり、「実御皮子」はその許に伝えられ、慈円聖教写本もその中に含まれていたようである。ただ、別表の一覧で見える通り「慈鎮御筆本」を含む「実御皮子」の本そのものがいかなる来歴を有し、また慈円によりいかに写し伝えられたかを伝える

情報は殆どない。⁽¹¹⁾

一方、「真御皮子」の本を書写したと伝える識語を有する聖教は僅か二点である。一は611『三種悉地記^{至極}』一冊、その識語は⁽¹²⁾

仁治元年十二月廿三日、於法雲房、以御書写本書了、成源⁽¹³⁾

とあり、更に「真御皮子」と傍書する。これは、本文中に慈円識語を含み（「承元三年^{己初冬}第十之候、乍懷其恐記之訖、金剛佛子々々」）承元三年（一二〇九）十月に記されたことが知られるが、この三種悉地法については、もう一点、これが同年十二月に後鳥羽院の御所で秘法として実修された際の記録として、やはり慈円が自ら記した聖教として30¹³『三種悉地^{摩訶}至極』一冊がある。これも同じく成源が「真御皮子」から書写した本であり、次のような識語を有す。

仁治二—正月四日、以飯室御房御書写本於法雲房書写了

この本には元仁元年（一二二四）四月に某が書写した旨の本奥書があり、それは慈円の在世時に遡るが、成源識語からすればこれが良快の「御書写本」の識語となるであろう。

この二点の、共に慈円が承元三年冬に三種悉地法について思案を廻らし、更に院の許で実修した記録に至る一連一具の聖教は、「真御皮子」に含まれていた、慈円著作「御抄」聖教の一部となっていた。⁽¹³⁾

吉水蔵には更に、73¹⁴『賀陽院殿秘法日記』一冊（元亨二年九月一日、以竹園藏本今書写了）の書写奥書を記す）が伝わり、この承元三年十二月十四日に行われた三種悉地法の修法記録で、伴僧として重要な役割を勤めた弟子慈賢による日記と推定される。これらの「三種悉地法」は、慈円の密教修法の実践に伴い、彼の院護持僧としての活動に伴う思惟と経軌にもとづく教義解釈が問答や談義を含めて克明に記され、その上で院の要請に応じて自ら進んで提案し実修を試み、その過程を弟子の日記まで併せて詳細に記録する、慈円の密教僧としての真面目が多元か

つ立体的にテクスト化されているところに、慈円著作聖教の典型が示されている。これが既に紹介された上述の四点の慈円聖教と同時期、西山往生院に隠棲しつつ院の求めに応じて出仕していた承元三年の秋（同時に『厭離欣求百首』を詠み、これに伴う仮名歌論を草したと推定される。⁽¹⁴⁾）という、最も多くの結実を見た時期の、おそらく頂点を成す重要な聖教著作であった。

吉水蔵聖教中には、この『賀陽院殿秘法日記』の如く、慈円による御修法の日記も多く含まれている。その多くは、助修や伴僧として働いた門弟による記録であるが、その主体はあくまで慈円であり、時には72¹⁴『法花法日記』一巻のように慈円の動靜が詳しく記される分もある。その本文中には、次の如く記される。

□□二年五月十四日、粗記之。（中略）只今記之間^{十五日}、法勝寺九

重塔為雷火俄以炎上、京中騒動、為法頗以不吉坎、周章之間、紙筆是抛、

そこには、慈円が最も得意とし頼む所の法花法を院の為に修していた結願日に際しての椿事に少なからず衝撃を受け狼狽した様子が、生々しく記されている。この法勝寺九重塔炎上は、後年、『愚管抄』巻六にも「記されるころだが、そこでは、折節、慈円が法花法を修し、その結願に当たつて炎上が起きたのは、本来院に当たるべき重厄を塔に転じた法験であると奏し、院はただちに塔の再建を命ぜられた、という自讃の纏末となっている。⁽¹⁵⁾これら慈円の門弟による修法日記の類も、吉水蔵聖教の重要な史料の側面である。

後掲する一覧表によりその全体を示した、『目録』から検出される慈円識語は、明らかに自身の著作として「金剛佛子慈円」「慈—」ないし「—」と全く名を略す場合もある」と銘記するものと、「御判」とするものがあり、後者は底本とした慈円の自筆御本などに花押が捺されて

いたものだろう。識語の多くは「記之了」や「書之了」と結ばれ、併せて自ら記したことを明言する、強い著作意識が示されている。一方で、門弟に「御自筆本」や草案などを賜与し書写させる事例も数多く、伝授の一環として自他の証本等を写さしめる分も含め、上述した修法勤修の記録と共に、院家における門徒らとの共同制作として聖教著作が営まれていた消息がうかがわれる。加うるに、この表の如く自ずから年譜化できるほどに識語に年代を明記する聖教が多いことは、聖教形成が青蓮院における慈円の活動において如何なる位置を占めるかをよく物語る現象であろう。

聖教識語が記しづける慈円の学僧ないし門流の棟梁としての履歴は、時期が明快に区別される。嘉応二年から文治四年までは伝受識語のみの修学時代であり、自ら著作を始めるのは、建久七年から正治元年にかけて、門弟と後継者に伝授する為の作法を抄記するようになって以降である。その後は修法日記を含めて独自の聖教著作を行うようになるが、座主在任時など世務の雑事に忙殺される時期には殆ど見えず、逆に建永二年に大懺法院を建立した後、西山草庵に住していた壮年期の承元年間¹⁶に、最も活発な聖教著作を集中的に行っていることは、前述の通りである。この後、建暦二年と同三年の二度に亘る座主在任期間を経た建保六年七月に著された69-7『五智』一冊は、承元の「三種悉地」法と通ずる密教思想の綜合化の展開と共に、七夕に毎年詠歌する習いや、別当職にあった天王寺から鷹飛来の瑞相を伝えられ夢想を蒙ることなど、やがて翌建保七年の正月に『難波百首』を太子の宝前に捧げるに至る慈円の心意を伺うに足る興味深い聖教である。この間、次第に後鳥羽院との疎隔を生じ、承久元年以降は院の祈祷を止め、同二年に『愚管抄』を著し、そして承久の乱に際会する。この間の重要な著作が、『目録』には慈円識語が採られなかった、60-12『本尊釈問答』一冊(元亨二年「和尚御自筆本」

を慈嚴が書写)である。⁽¹⁷⁾

『本尊釈問答』は、本文中に「承久二年正月六日、於無動寺大乘院書之了、金剛佛子慈」と、明確に己の著作であることを記し付ける典型的な識語を含む。その全文の翻刻と共に、阿部美香が解説するように、本書の冒頭とその識語の前には、この時期の慈円による重要な著作についての言及があり、それによれば、むしろ本書はその著作を補完する為に書かれたものである。そこには、既に承久元年の夏から秋にかけて真俗二諦の理を示すべき「道理」と「本尊釈」の二巻が書かれたことと、更にこれに「問答」一帖を加えることにより、その理の意義を門徒らに教え、末代に伝える為に、一具とすべく書かれた旨が、再三に亘り説かれている。前半は(裏書の挿入部分を含めて)、おそらく「道理」の梗概が記され、建保七年正月の実朝横死に始まる世の転変と、その結果、九条道家の息三寅の関東下向から、祈願の成就を期して自ら「道理」を諸社に啓白し感応を得たことなど、従来知られなかった慈円の活動と共に、総じて承久二年秋に成った『愚管抄』の萌芽をなすような記事に満ちている。本書の出現により、これまで『愚管抄』との関係が問われていた「道理」^卷(西園寺公経宛慈円書状)が、真諦の書としての「本尊釈」一巻に先立って俗諦の理を示す諸神への啓白文として成立し、これに明かされる動向を経て『愚管抄』成立に至る経緯が明らかにされた。本書がよく示すように、慈円の聖教著作は、全く世間から隔絶したスコラ的な議論に自閉するのではなく、常に世俗と呼応し、働きかける対話の所産である特色がよく示されているといえよう。

三 『欠書目録』から復元される慈円の聖教体系

慈円の著作聖教の、現存する唯一無二のアーカイヴである吉水蔵聖教をいかに解説しつつ位置付け、その本来の体系や形成の歴史的文脈を復

元するか。「真実二合御皮子」聖教の消息やその構成を含め、未だ明らかでないことは余りにも多いが、吉水藏にはその片鱗を窺うことのできる貴重な資料が伝えられる。その一つが、30-24『欠書目六』^録一紙（鎌倉時代写本）である。次に解説したその全文を掲げる。⁽¹⁹⁾

欠書目六

一結 法花内

・法花別帖一、 慈快本

一結 秘経抄

・秘経別一、 御自筆

一結 大熾盛光内（*抹消注記）

秘々中深秘^{私六一}、

護摩四壇子細^{私十一}、

大熾盛光^{私一}、

一結 仏眼内

深秘私記一、

一結 入三摩地内

・道場観一切行法一、 慈快本

一結内

・文殊八字根本印事一、 御自筆

一字^{時処}一、

金輪^{私一}一、

十字主字明事（*抹消線）

・金輪^{私記秘} 慈快本

（舍利力）

□□法事一、

公潤本
慈快本

・界外生起一、 慈快御本

・求聞極秘一、 御自筆

・瑜祇経^{秘抄}一、

・不空絹索事一、

許可^私

・伝法作法^{十八道以下一}、

・五大尊六観音一、 御自筆

一結

・道理^{復本尊擬尺一}、

・本尊尺問答一、

・己心啓白目六一、

・祈願観念一、

・御祈事一、 西谷所

以上

『欠書目録』には、七結二十五点の書目が列挙され、そのうち四点に「御自筆」、また四点に「慈快（御）本」と注す。これが慈円の聖教の目録であることは、最後の一結に「道理^{復本尊擬尺一}」と「本尊尺問答一」が並んで掲げられていることで諒解されよう。そこからこの目録が、慈円の聖教等を聚めた何らかの集成のうち、七結分について確認された「欠書」の分を書き上げた覚書ではないかと推測される。その全体は七結以上から成り、この二十五点以外に、当時現存する相当の規模を有した一合（ないし複数合）であった筈である。しかも、その欠を点検し、不足の分の書目を書き上げる母目録が完備していたと思われる。しかし、注目すべきは、ここに挙げられた二十五点の欠書の内、『本尊尺問答』のほか、吉水藏に現存し確認できる書目が七点にも上ることであろう（つまり、この「欠書」を含む母体の聖教は、吉水藏のものではないと考え

られる。

吉水蔵に現存する慈円聖教の、「欠書」と同定できる分を、現存『目録』に登録される書名によって示しておこう。

「法花別帖」↓（『法花別帖』69-13）

「秘々中深秘私六」↓（『大熾盛光口決』72-10）

「大熾盛光私」↓（『大熾盛光護摩壇通用次第』72-1）

「深秘私記」↓（『深秘私記』54-4）

「道場観一切行法」↓（『道場観一切行法』89-3）

「求聞極秘」↓（『葉師私記求聞極秘』66-2）

「不空羅索事」↓（『不空羅索事』73-3）

以上のうち、最も注目されるのは『法花別帖』であるが、これについては続稿を参照されたい。これらの各聖教についての検討は続稿に譲ることとするが、ここでは七結のうち前半に「法花」「秘経抄」「大熾盛光」「仏眼」「入三摩地」の名目が付されることに注意したい。これらは何れも、慈円の台密思想にもとづく枢要な主題であり、あるいは経法であり、本尊および修法の名目である。これらのカテゴリーを一結の名目に付して類聚した主体は、慈円の密教思想をよく理解する後継者もしくは慈円その人であろう。

たとえば、このうち「大熾盛光」一結の場合、吉水蔵には、現在複数
の箱に分散するが、その内容に「私一」から「私九」まで通番を付す、
慈円による一連の大熾盛光法の、護摩次第から作法・口決・種子に至る
総合的な聖教体系が復原できる。²⁰これと同様な（しかも吉水蔵に無い「私
二」と「私十」までを含んでいた）体系の一結がここに存在し、それは
吉水蔵本によれば造営された大熾法院において御願の大熾盛光法を始修
する建永元年の前後、建仁から承元にかけての長期にわたって著されて
いるのである。このような復原と分析が、今後、末尾に掲げる吉水蔵の

一覧に掲げたテキストとその周辺を精査することにより可能となろう。

なお、特に名目を付さない後半の二結についてみれば、第六は一字金輪や舍利法などの秘法から、如来、秘経、観音、五大尊など諸尊法と御修法に関わる聖教と、許可、伝法作法など灌頂伝授に関わる、密教の多様な実践的側面を含むものであり、これらも吉水蔵の一覧に類似し相当する聖教が多く存しており、今後の精査と解説によって改めて位置付けられる著作も増加するであろう。また、最後の「一結は、「道理」「本尊釈」と「本尊釈問答」の一具を含んでいたこと（つまり、この目録により「本尊釈問答」の慈円識語に言う「二巻一帖」が「道理」と「本尊（擬）釈」そして「本尊釈問答」であったことが確実に裏付けられる）をはじめ、他の三点の「欠書」についても興味を惹かれる。「己心啓白目六」と「祈願観念」は、特に晩年の慈円が繰り返し仏神や太子に啓した願文や表白を想起させるものである。最末の「御祈事」は、吉水蔵には伝わらないが、真福寺大須文庫に、二世信瑜が東大寺東南院門跡聖珍法親王より伝えて写した「御祈事」一帖により、慈円が正治二年に後鳥羽院に奉った、山門以下諸寺の大法秘法の目録と仮名の旨趣であることが知られる。²¹以上、「欠書目録」という、失われた書物の、タイトルから、逆説的に慈円の聖教著作の全体像へ接近する途を、吉水蔵聖教を通じて見出すことができる、その可能性を提示した。

なお、この『欠書』を点検した、その母体となる蔵書てくらぐらについて推考したい。その手掛かりは、書名の注記に慈円の「御自筆」本を多く含むこと、また同じく「慈快（御）本」を多く含むことである。「慈快」の名は、吉水蔵聖教の中に見いだすことが出来ない。青蓮院門流には直接に属していない僧であったか。ただ、慈円の出家時の名を、師覚快から諱を受けて道快と言ひ、また慈円の譲を受けてその聖教を継承したのは妙香院良快である。良快の許にあった「真実御皮子」は飯室御房にあ

り、その聖教は「慈鎮（和尚）御筆本」と良快の「御筆本」から成り、慈円の資である成源は、その許で「真御皮子」の本を写し伝えていた。「慈快」は良快の初名であり、「欠書」の母胎は、この「真御皮子」そのものである可能性が想定される。

（阿部泰郎）

註

- (1) 村田正志「青蓮院吉水蔵に於ける慈円史料」『歴史地理』八四一、一九五三年。
- (2) 赤松俊秀「愚管抄について」『ビブリア』二、一九五〇年（鎌倉仏教の研究）平楽寺書店、一九五七年。
- (3) 多賀宗集「本尊縁起」『金沢文庫研究』一二五、一九六六年（論集 中世文化史下僧侶篇）法蔵館、一九八五。
- (4) 『慈円』（人物叢書）吉川弘文館、一九五九年。『校本 拾玉集』吉川弘文館、一九七一年。『慈円の研究』吉川弘文館、一九八〇年。
- (5) 天台宗典編纂所編『続天台宗全書』密教2、同密教3、春秋社、一九九〇年（三崎良周解題）。
- (6) 赤松俊秀「慈鎮和尚夢想記について」『鎌倉仏教の研究』註(2) 前掲書。
- (7) 阿部泰郎「慈円作『六道釈』をめぐる一慈円における宗教と文学及び歴史」『文学（季刊）』八一四、一九九七年（『中世日本の世界像』第八章「中世的知の統合」、名古屋大学出版会、二〇一八年再収）。
- (8) 吉水蔵聖教調査団編『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』汲古書院、一九九九年。
- (9) 多賀宗集、註(3) 前掲書、三六七三七七頁。
- (10) 山本信吉「青蓮院門跡吉水聖教について」(註(8) 前掲書) 六七九頁。
- (11) 「別表」62-7 『護摩秘傳』は、建保四年に進経が「妙香院僧正御房（良快）本」を写した本だが、書写識語に続いて「此口訣ハ実皮子中正本有之、先師真筆也、仍入加書写本者也、故宮御判也、（花押）記」の識語を加え

る。もしこれが慈円の識語であれば、実御皮子本の形成過程の一端を伝えるものとなる。また80-2「不動」（延応二年に「実御皮子本」慈鎮御筆也）を写した）には、寿永二年に無動寺証明院にて「抄之了」の本奥書がある。当時、慈円は無動寺検校であった。

(12) 吉水蔵には『三種悉地記五巻』が二本（61-1・56-10）伝わる。ここに採るのは仁治元年の成源写本であるが、『目録』（三二七頁）では仮題「最極秘密事」とする。これは表紙が欠損し初丁の標目の事書のひとつを宛てたと思し、本来の題は56-10鎌倉中期写本に拠るべきだろう。但し、56-10写本には書写識語と「真御皮子」の注記はない。

(13) これら「三種悉地」法関係慈円聖教については、あくまで『目録』の情報に拠ってではあるが、既に拙稿「文学研究としての中世宗教テクスト諸位相の探求」四、宗教テクストの主体としての慈円とその書かれたもの（阿部編『中世文学と寺院資料・聖教』（中世文学と隣接諸学2）竹林舎、二〇一〇年、三〇頁）に指摘した。

(14) 多賀、註(4) 前掲『慈円の研究』一八〇-一九二頁。

(15) 「サテ又ユ、シキ事ノ出キタリケリ。承元二年五月十五日、法勝寺ノ九重塔ノ上ニ雷ヲチテ火付テ焼ケニケリ。アサマシキコトニテアリケリ。ホカヘハカシコクウツラズ。ソノ時院ノ、御ツ、シミヲモシ。シルシアリナントヲボエン法、マイリテヲコナヘト慈円僧正ニ仰ラレタリケレバ、法華経ヲオコナイ候ハントテ、助衆二十人グシテ、院ノ御所ニテ、七日ハテ、出タリケル後、ホドナクコノ塔ノヤケニケルヲ、僧正イミ、ジク案ジテ、御所ニ候シホド、修中ニ焼タラバ、イカニ遺恨ナラマシ。但コノ事ハ一定、君ノ御ツ、シミノアルベカリケルガ、コレニ転ジヌルヨト思テ、ナ歎ヲボシメシ候ゾ。コレハヨキ事ニテ候。タゞシ、ヤガテイソギツクラル、御沙汰ノ候ベキ也。当時ヤケ候ヌルハ、御死ノ転ジ候ヌルゾ。ヤガテ伊予ノ国ニテ公経大納言ツクレトテ、ホドナクツクリ出ントシタクシケル（下略）（赤松俊秀・岡見正雄校注『愚管抄』二九一七頁、岩波書店、一九六七年）。表記は私に改めた。

(16) 『天熾盛光口決』（建永元年十一月九日）、『法花法日記』（承元二年五月十五日）、『天熾盛光秘傳（種子事）』（承元三年二月二十四日）『西山草庵書之』

『毘迦別』（承元三年六月）「西山草庵書之」、「両界初行」（承元三年九月二日）「賜御本書写」、「厭離欣求百首」（承元三年十月十五日）「拾玉集」、「法花別」（承元三年八月二十九日記、十一月十三日夢記、承元四年九月二十九日成源記）、「薬師私記（采問秘秘）」（承元三年十一月、建暦三年正月二十七日写）、「三種悉地記（至極）」（承元三年十二月十日）、「三種悉地（法摩訶至極）」（承元三年十二月十日）、「蘇悉地経問答」（承元四年二月二十四日）、「秘経抄（毘盧遮那別行法経私抄記）」（承元四年二月二十七日）、「北斗入三摩地」（承元四年五月二十二日）、「法花新私記」（承元四年八月二十日）、「仏眼法」（承元五年正月下旬）

(17) 阿部美香「慈円撰述『本尊釈問答』」『東京大学史料編纂所紀要』二九、二〇一九年。

(18) 坂口太郎「『愚管抄』成立の歴史的背景―慈円『本尊釈問答』を素材として」（元木泰雄編『日本中世の政治と制度』吉川弘文館、二〇二〇年）が指摘する『本尊釈問答』に見られる一丁分の本文挿入の形態は、袋綴冊子写本の小口を切り開き生じた裏面に本文を追記することで生じた現象だが、このような方法から生じた本文、錯簡は、前述した『三種悉地記』により大規模な形でなされ、『蘇悉地経問答』ではほぼ全体に亘っている。吉水蔵慈円聖教写本におけるこの現象は、おそらく慈円自身によるテキスト生成における「草子」を用いての記述過程の結果であり、それを書写者が忠実に再現したことに由来するものだろう。

(19) 阿部美香と共に解説。

(20) 吉水蔵聖教中の慈円「大熾盛光」一結は、おそらく「私二息災」分を欠いた以下の八点が現存する。

72-1 『大熾盛光六種護摩壇通用作法』一冊

72-7 『大熾盛光私一』（建仁三年正月、於鞍馬寺書之）「識語抄」

72-7 『大熾盛光敬愛 私二』一冊（72-8 『大熾盛光私三』と同本）

72-6 『大熾盛光敬愛 私三』（佛眼成就檀・敬愛護摩次第）

72-6 『大熾盛光』一冊

72-6 『大熾盛光増益 私四』（日月五星壇・増益護摩次第付髮師）

70-17 『大熾盛光降伏護摩次第』二冊

72-12 『大熾盛光降伏 私五』（息障明王壇・降伏護摩次第）

72-12 『大熾盛光口法』一冊
「秘々中深秘私六」（本文中に「建永元年十一月一日、大略再治」識語、奥書に「金剛佛子慈一記之」識語）

72-11 『大熾盛光々々々々々々秘』一冊

72-12 『種子事私七』（已上、承元三年二月廿四日、於西山草庵書之了）「識語」

72-12 『大熾盛光護摩壇通用作法』一冊（70-16 『大熾盛光私八』と同本）

72-9 『大熾盛光支度卷数 私九』（元久三年二月七日、於九条御壇所、賜御本書写了、成源）「識語」

72-9 『大熾盛光支度卷数 私九』一冊
「大熾盛光支度卷数 私九」（建仁四年二月八日、宇治平等院の記を含む）
（なお『欠書目録』には、「護摩四壇子細私十」を挙げる故、十帖以上で構成されているらしい。）

(21) 伏見宮御記録利七三「大法秘事写」を『大日本史料』第五ノ二に収め、また、多賀宗集編『慈円全集』（七条書院、一九四五年）にも収めるが、初丁欠、後欠の不完本である。完本は、真福寺大須文庫（四九合）『御祈事』信瑜写本一帖、文永元年隆瑜、康永四年隆静本奥書（「文永元年子三三月十四日、以西郊権僧正成源自筆之御本書写筆」）。本文中の仮名交り文の慈円奉進文に続く成源識語は、以下の如くである。「正治二年七月廿七日、依 院仰せ、内々令註進之状也。被引先之間、重依被仰下、建暦元年五月廿三日、以光親卿被進畢。天王寺御參籠之間、賜草本、檀紙十枚を続々於岡崎房清書、直光親卿之許へ進畢。後日為不審、成源記之。」

【付記】貴重な吉水蔵聖教の画像を活用させていただき、かつ紹介をご許可賜りました青蓮院門跡 東伏見慈晃殿下に深く感謝申し上げます。また、本研究は、JSPS 国際展開拠点形成事業（先進型A）Collaborationプログラム「テキスト学による宗教文化遺産普遍的価値創成学術共同体の構築」（名古屋大学・研究代表者：阿部泰郎）によるコレージュ・ド・フランス（代表：ジャック・ロペール）との国際共同研究による研究成果を含んでいます。

吉水藏慈円関係聖教一覽 凡例

本一覽は、『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』(一九九九年)に拠り、更に東京大学史料編纂所に所蔵される青蓮院吉水藏撮影マイクロフィルムをHOUTにより閲覽し確認を経て、慈円の著作でない慈円の伝受書写、もしくは慈円の周辺で門弟らが書写、記録した、広義の慈円関係著作と判断された分について抄出し、年代順に排列したものである。

- 一、抄出の範囲は、当該資料が慈円に係ることを示す奥書識語等の記述を中心に、その函号番号・書名・数量(装丁)・外題・内題(書名と等しい場合は省く)とその奥書・識語について行つた。なお、①慈円によると判断される識語はその箇所や性格等を()で示した上でその下に「」で引用し、②慈円以外の門弟・後人による分は全て()内に収めてその中に「」で示した。以降の書写・伝領識語は多く省略したが、*に重要な情報を備考として注した。

一、書名以下、識語の人名等の本文は原則『目録』に拠るが、HOUTで確認

◎吉水藏聖教慈円関係聖教一覽(慈円識語を有し、年代を記す分)

函号	書名	数量	外題・内題(書名と異なる場合)・奥書・識語
27 20	所収「伝受日記」 歡喜天	一帖	(冒頭)「自嘉応二年三月廿二日、始之」 (奥書慈円識語)「嘉応二年閏四月廿七日、随中道房受了/道快」 *長暦元年写本・延久六年良祐加點
25 17	火許供養儀軌	一帖	(奥書慈円識語)「嘉応二年六月十四日、随中道房阿闍梨奉受了/道快」
3 1	金剛頂經大瑜伽 秘密心地法門義訣卷上	一卷	(奥書慈円識語)「嘉応二年七月廿五日、随中道房阿闍梨、奉受了/道快」
70 7	熾盛光儀軌	一帖	(奥書慈円識語)「嘉応三年正月廿七日、随中道房阿闍梨伝受了/道快」
木1 24	鎮壇	一帖	(本奥書慈円識語)「御本云/承安元年七月廿八日、依御命書付之、返々見苦、不及他見/道快」*文永写本。
60 1	三部経秘所	一帖	(奥書慈円識語)「承安二年二月廿二日、白川御房於護摩堂北妻、中道房阿闍梨御房證本書写了」*表紙尊純識語「慈円御本也」 (道覚伝受識語)「奉随大乘院大僧正、伝受三部経之時所給也/佛子道覚親王」
70 9	熾盛光	一冊	(仁平四年全玄識語後慈円識語)「入金剛佛子慈円記之 <small>道快</small> 」 (奥書慈円識語)「已上記、是三昧阿闍梨御房御作也、以御本、承安四年十二月五日書写訖/求法佛子道快」

の上、一部、私に改めた箇所がある(例、「公源」↓「成源」など)。(多く「慈」とのみ示す)慈円識語の認定を含め、その判断の理由は一々に記していない。

一、文字表記は、『目録』と異なり、全て通用字体に改めたが、一律ではなく、「佛」「證」などはそのままとした。改行の指示「/」は、一部を除いて省略した。

一、本一覽には、本文中の「別表」に示した「実御皮子」の「慈鎮御等本」の分は省いた。また、門弟が慈円「御本」を賜って写した分は含めてあるが、門弟(慈賢など)自身の著作と判断される場合は省いた。

一、一覽の末尾に、成立年代(ないし慈円在世時の書写年代)未詳の、しかし内容や識語等から慈円の著作・関係聖教と推定される分の一覽を付載した。但し、その内容を読解した分は猶その一部に留まり、今後の精査検討に委ねたい。

函号	書名	数量	外題・内題（書名と異なる場合）・奥書・識語
門葉記	所収「観性法橋日記」		
61 9	受法之間雜日記	一冊	「養和二年二月八日戊刻、於白河房甘露王院西妻、随中道房阿闍梨許可了」 〔本文冒頭〕「寿永元年 <small>貞元</small> 十一月廿三日 <small>寅庚</small> 、随桂林房僧正 <small>金玄</small> 、伝受許可事〔下略〕文永十年尊澄書写。
78 5	延命私記	一冊	〔本奥書慈円識語〕「已上兩度日記、寿永二年二月廿六日、以正本書写了／金剛佛子慈」 *久安五年全玄記／建仁三年三月七日書写識語
80 2	不動	一帖	〔本奥書慈円識語〕「寿永二年十二月六日、於無動寺證明院抄之了」
76 9	求聞集	三冊	〔上冊本奥書慈円識語〕「寿永三年二月六日、於九条新御所書写了、在御判」 〔本奥書校合識語〕「正嘉元年十二月四日、於三条房交合了、尊 <small>助</small> 親王」 〔奥書書写識語〕「文永十二年正月八日、於原草庵書写校合了、此御抄者、去年冬申出了、蒙古凶賊責来之間、為広田社御折懇修問、不能馳筆返之了、仍、次年、重申出書写了、／遍照金剛公澄」 〔下冊中間慈円識語〕「 <small>親本</small> 、寿永二年十二月十九日、於無動寺證明院午尅許書写之了」 〔一本書有恐殊書之了、不可出困外努力々々〕「于時、天下有乱、山上無靜／金剛佛子、」 〔下冊本奥書慈円識語〕「寿永三年二月六日、於九条新御所書写了、在御判」 〔建保五十一十一月十日、於吉水新御所書写之了、交合了、一ヶ条不書之、已上事記之〕 〔本奥書書写識語〕「建長五年三月廿日書写了、手自校合了、仏子 <small>在御名</small> 」 〔奥書書写識語〕「文永十二季二月八日、於北山嵯峨原御房、書写校合了、／金剛佛子公澄」
54 16	両部密印	二帖	〔金界密印本奥書慈円識語〕「元暦元年六月廿八日、於青蓮院書写了、金剛佛子慈」 〔胎藏密印本奥書慈円識語〕「元暦元年七月三日巳刻、於青蓮院書写之畢、求法沙門慈、校了」 *正和二年写
46 10	胎金生起	一帖	〔本奥書慈円識語〕「元暦二年 <small>巳</small> 正月四日、於西山往生院本房、以中道房阿闍梨本書写之訖、則校合之、阿闍梨被示云、此本尤秘藏之本也、只一卷書也、両部行法大概、不可過之坎、可秘藏々々」 *覚超作、長治二年識語、弘長三年真澄写
73 1	佛眼	一帖	〔元暦二年 <small>巳</small> 正月六日 <small>寅庚</small> 、於西山往生院本房、為隨身書写之、金剛佛子」
93 13	禾久抄（秘経抄）	一冊	〔本奥書慈円識語〕「元 <small>曆</small> 二年正月十日、於南山大乘院禾久（秘経）一反披覽之、但未委細、只梗概許見之 <small>天</small> 、少々愚抄 <small>ニ</small> 抄入了、又、此帖 <small>ニ</small> 聊書付置事等 <small>アリ</small> 、委可見事等」 「可見之書付了、在御判」
73 2	十一面決	一冊	〔内題下〕「文治二年後七月廿二日、於靜房決之、同聽三人、廿四日聞了、重書了」 〔奥書書写識語〕「承元三年六月十二日、於吉水隔屋、以師御本書了 <small>云々</small> 、成源」
81 9	降三世決	一帖	〔内題下〕「文治三年正月二日、於靜房決之」 *81 5〔降三決〕奥書参照。

81 6	金剛夜叉決	一冊	〔奥書慈円書写識語〕「文治三年六月十四日、臨衝黑馳筆書之也、尊師口決奉面受了、金剛佛子〔花押〕」 〔奥書追筆〕「建永二一十六日、於岡崎御房、於證本以御本交合之、書人又除之点了、尊澄」
48 8	毗盧遮那別行經	一帖	〔本奥書慈円識語〕「本云 文治四年五月四日、於雙輪寺御房、奉從座主御房奉受了、所被示云、此經奉伝受故御房 <small>青蓮院 座主御房也云々</small> 〔本奥書〕「師本云、承元二年五月四日、於吉水御房、奉從前大僧正御房奉受了、金剛佛子公円、同聽之、慈賢、祐真」 *永久四年良祐本を書写、元永元年に勝豪へ伝受。
〔胎藏八字頓証行法口伝〕			
52 6	金剛界手記 〔外題「金灌頂式」〕	一卷	〔本奥書慈円識語〕「建久七年十一月十二日、抄出之」 〔本奥書道覚識語〕「先師慈鎮和尚付属康榮寺僧正〔慈賢〕、々々入滅後、所伝領地、／金剛佛子道覚親王記」「建長七年正月八日、自青蓮院前大僧正御房、謹以伝領之了、／金剛佛子道一記之」此手記者、和尚、慈賢僧正、々々伝座主官、々々々伝前大僧正、々々御房賜道一已畢、喜悅千廻々々、雖摧頭目髓腦、争奉此恩德乎」
62 4	護摩	一帖	〔外題〕護摩雙／護摩私 〔本奥書慈円識語〕「御本云、本云建久八年四月廿八日書写之云々、此私記、故雙輪寺前大僧正私被書出也、為弟子僧達初行也云々、穴賢々々、他人不可披見之云々」 〔本奥書書写識語〕「御本云、建保六年三月十五日、賜御本書写了、佛子聖一」 〔奥書書写識語〕「嘉禎四年閏二月十五日、賜御本書写之、／佛子公玄」
89 2	諸尊集	一帖	〔本奥書良祐識語〕「御本云、元永二年正月廿九日、於青蓮房書了、同二月四日、梵字移点了、同十一日校合了、良一」 〔奥書書写識語〕「建久九年十一月一日、於吉水御房、賜此御草紙、同十年正月廿四日、於同隔屋書了、／金剛佛子惠契」
60 3	自行次第	一帖	〔外題〕自行次第上 〔奥書書写識語〕「正治元年十二月十四日、於吉水御房賜之、仰云、此私記、三昧阿闍梨良一製記也、以此私記可行用也云々」 〔同月十八日、於客人彼岸所書写之、／金剛佛子快記之〕「伝領安快」
木箱 3 35 (3 36) (3 12)	〔毗逝〕	七冊	〔本奥書〕「三戒兩界讚衆用心如此、各存知此旨、不可違乱也、雖停止外見、於親近之輩者、尤可書写也、但、不可披露之々々々、／金剛佛子某記之、正治元年十一月廿一日、書付了」 〔良尋書写識語〕「正治元年十二月十九日、於吉水□□正本書写了、即交之、／金剛佛子良尋」(第七冊) 〔本奥書慈円識語〕「正治二年閏二月記之、凡、去冬今春之間、都合八帖令鈔記了、秘中深秘密也、努力々々」 〔慈円書写識語〕「建曆元年十二月十一日、於白川房、以御筆之本書写了、此書雖故法印御房〔良尋〕被書云々、／金剛佛子慈円(第一冊) □□□」

函号	書名	数量	外題・内題（書名と異なる場合）・奥書・識語
3 36 木箱	〱 (毗逝)		寛元四年教快・澄源写本（第二册本奥書）「御本伝、建曆二年十一月十八日、於吉水御所東対、賜御本、子時許書写了、 金剛佛子 ^{御也} 」
61 2	七箇条 ^秘	一帖	（成円本奥書「書本本云云」正治二年閏二月十七日、於吉水御所奉受之了、即翌日十八日、以桂林院大僧正御自筆本書写之、 奉受之時、根本三昧阿闍梨御本引合令交御、仍少々文字直之、普賢延命次第相違、仍如根本之書之、先作降三世、次五秘 密軌 ^{云々} 、次々書所也、書本如此、 末学金剛佛子成円記之） * 61 4 「附法事」に慈円が記す「切留七ヶ条」に相当するか。
94 3	秘教文集	一帖	（祐真本奥書「御本云云」建仁元年八月廿一日□許、賜預了、 金剛佛子祐真）
55 1	許可	四帖内 (一)	「授許可作法」 （慈賢本奥書「建仁元年九月廿六日、於白川御房、以御筆本書写了、即交了、慈賢」）
31 5	別行経	一帖	（慈賢本奥書写識語「建仁二年五月十一日、於白川御房、以桂林院阿闍梨自筆本、敬奉写畢、即一交畢、依書写誤落字 等令入之了、同十三日移点了、 同四月廿三日、又奉受之、其後書写之、 金剛佛子慈賢（後略）」 （道覚伝領識語「仁治二年四月十五日、慈僧正円寂之後、伝領了、 金剛佛子道覚」）
57 4	曼荼羅供作法	一帖	（外題）曼供作法／曼荼羅供 ^私 （奥書祐真書写識語「建仁二年臘月三日、以御筆本書写了、 金剛佛子祐真」「一交了」）（伝領識語「伝領佛子道玄」）
72 1	大織盛光六種護摩壇通用作法	一册	（慈円本奥書）「護摩壇通用次第□帖 四種護摩各々次第并秘々中深秘鈔等、建仁三年正月、於鞍馬寺室書之、□努力々々々々 器量之外人不可□□□□可触耳、不可当眼、□意、只任本尊之知見□□□、冥衆之許可也、慈□□憤□□」
73 11	仏眼法日記	一册	（冒頭）「建仁三年十月十九日、於宇泉小川御所、為院御祈、被修佛眼法」 （本奥書慈賢識語「御本云、建仁四年正月四日、於宇治小川御所、聊記之、慈賢注之」）
3 31 木箱	〱 別上	一帖	（卷末夢想記識語）「建仁三年六月二十二日晚夢云、（中略）……秘教之宗義、以此夢想所開悟、仍此後之覺知故、記之了、 前大僧正慈一謹記也」 （本文末尾慈円識語）「……粗伝聞之、記文云、見證云、今夢想云、三ヶ事共以符合訖、珍重不思議、言語道斷、仍故記置 此菓子者也、 同四年正月一日、於宇治小川房記之了」 * 「統天台宗全書 密教3」翻刻所収
87 3	地火羅水等	一帖	（外題）地火羅水等 ^{大天} （内題）十二天各別事／和尚被仰云 （本奥書慈賢識語「元久元年七月廿七日、於吉水御房粗記之、雖非当用、是為守師說所書置也、此外又、多同別行、弁才天、 摩利支天等、西山法橋抄、可足欵、明師之口伝、已得大意、行用始末、何暗字、諸天等之行法、以是等趣、可准知欵、金 口誠言也、不可為聊尔而已、木真言師慈賢記之」） （奥書公澄書写識語「建治二年五月四日、於岡崎房書写校合已了、 金剛佛子公澄」）
83 10	四天王	一册	（本奥書慈賢識語「元久二年後七月廿日、為令法久住、聊記之、和尚仰云、地藏房 ^{進教} 記、目出物也、以之可為本云々、末肆 慈賢記之」）

71 12	大熾盛光護摩壇通用作法	一冊	(外題) 大熾盛光 <small>私八</small> 護摩壇(通用秘/深秘) (與書成源書寫識語「元久三年二月七日、於九条御壇所、賜御本書寫了、/成源」「交合了」) (外題) 北斗決 <small>護摩法等</small> (内題) 北斗法 (表紙識語「北斗護調様等被載之、此外重々秘説在之、不可及他見者也」) (本文中・末尾伝受識語「建永元年六月六日、於岡崎御房面受了」「建永元年六月七日、別紙給之、究竟秘事也」)
83 2	北斗決	一帖	(本奥書慈円識語)「已上秘事、私記之旨、猶以不載之事、以口決之心記之、不見口決事、又属當時行事、加潤色、為備廢亡、具記之、非面受弟子之外、不可披之、/金剛薩埵能々可守護之給、金剛佛子慈一記之」 「此事後日有開悟之旨、乍思記第七帖畢」「建永元年十一月一日、大略再治畢、努力く」*70-16同本 (外題下)「建永」/鎮御筆記也(本文冒頭)「予開悟此義也、新抄其心云」 (本奥書慈円識語)「于時、建永元年十二月十五日書了了、一昨夜者、十三日夜也、十三日故前大僧正遠忌、仍向雙輪寺旧房 <small>タリ</small> 」
72 12	大熾盛光 <small>口決</small>	一冊	(本奥書慈円識語)「于時、建永元年十二月十五日書了了、一昨夜者、十三日夜也、十三日故前大僧正遠忌、仍向雙輪寺旧房 <small>タリ</small> 」
106 1	事常草	一冊	(端裏書寫識語「建永二年二月十一日、以御本書之、尊澄」)*本文は種子図のみ。 (與書尊澄加點校合識語「建永二年二月十六日、於岡崎御房、以御本交合之処、相違有之処、点等移之、交合了」) *81-6(金剛夜叉決)、81-7(大威徳)に同日の共通する尊澄識語。
79 4	十九布字	一通	(與書書寫識語「承元二年四月□、於岡崎御房、賜御本□燈本書寫了、尊澄金剛之」)*81-6より11まで一具の五大尊法。 (公円伝受識語「師本云、承元二年五月四日、於吉水御房、奉従前大僧正御房奉受了、/金剛佛子公円、同聽之、慈賢、祐真」)天福二年尊助伝受識語。
81 8	軍荼利	一冊	(與書識語「□□二年五月十五日、粗記之」)「只今記之間 <small>十五日</small> 、法勝寺九重塔為雷火俄以炎上、京中騒動、為法頗以不吉欵、周章之間、紙筆是抛」) (外題) 種子事 <small>私七</small> (本奥書慈円識語)「已上、承元三年二月廿四日、於西山草庵書了了」
81 11	五尊合行法	一卷	(慈円識語)「承元三年六月、於西山草庵書了了、本所記之本、甚以狼藉也、大略如反古、仍、聊以書改之也、永納函底、勿令外人披見之、何況書寫哉、不可伝此双紙於二人、付法之人一兩、可許披見欵」*「統天台宗全書 密教3」翻刻所収 (本奥書慈円識語)「已上四箇大事、依悲斷種、經 奏聞、少々授弟子了了、然而、如存知得其心之人如何、於此上下兩帖者、多不可令人書寫也、只必一人可為付法、門徒深存此意、不可聊尔、/金剛佛子前大僧正天台座主法務大僧正法印大和尚位慈一記」 *「統天台宗全書 密教3」翻刻所収
48 8	毗盧遮那別行經	一帖	(本文中書寫識語「承元三年九月二日、賜御本書寫了、本是雙林寺御房御筆也」) *慈賢「四帖秘決」に同題「御本」を含む。
72 14	法花法日記	一卷	(本文中書寫識語)「承元三年九月初冬第十之候、乍懷其恐記之、/金剛佛子、」*61-1仁治元年成源寫本は同本。
72 11	大熾盛光々々々々々々 <small>秘</small>		
3 31	木箱 α (毗逝) 別上	一帖	
3 32	木箱 α (毗逝) 別下	一帖	
47 2	両界 <small>初行</small>	一帖	
56 10	三種悉地記 <small>至極</small>	一冊	

函号	書名	数量	外題・内題（書名と異なる場合）・奥書・識語
66 2	業師私記	一帖	（外題）業師記 <small>私</small> ／未開極秘 （本奥書慈円識語）「承元三年十一月 日記之、以祐真闇梨為手代、修上皇御祈之間、為令彼人悟此心、記而与訖、／金剛佛子慈一記」（奥書全宗書寫識語「建曆三年正月廿七日、賜御本、廿九日書寫訖、全宗」）*66・3・4も同本の写本。
69 13	法花 <small>別帖</small>	一冊	（本文中慈円識語）「……如此事、争雖未代不信哉、尤感悦々々、承元三年八月二十九日記之」 「……承元三年十一月十三日夜夢云（夢記略）」 *「統天台宗全書 密教3」翻刻所収
30 13	三種悉地	一冊	（外題）三種悉地 <small>悉地</small> （内題）三種悉地法 （冒頭）「承元三年十二月、賀陽院御所被立直之後、重可修鎮法之由、殊蒙仰之間、安鎮先訖、築垣等如本、不能重修之、仍以今法修之也」 （本奥書書寫識語）「本云／元仁二一四一十日、書寫了、一交了云」 （奥書成源書寫識語）「仁治二一正月四日、以飯室御房御書寫本、於法雲房書寫了、一交了、成源／真御皮子」
73 14	賀陽院殿秘法日記	一冊	（内題）「承元三年十二月十四日、於賀陽院殿被修大法日記」（慈賢記）
31 2	普賢延命日記	一帖	（外題）熾盛光堂 <small>大興院</small> ／普賢延命日記 <small>承元四年正月廿二日</small> （冒頭）「承元四年正月廿二日、於吉水御本房、熾盛光堂被修普賢延命 <small>法</small> 」 （本奥書慈胤識語）「建保四年九月廿三日辰一点書寫了、卿師為助修、親所見聞被記註者也（以下略）」宝治二年澄宴写本。
50 10	毗盧遮那別行經	一帖	（成円伝受識語）「承元四年二月十九日、重伝受西山僧正（慈円）御房了」 *治承五年快成写、同年慈円伝受識語。「治承五年二月廿五日奉受了、同日立印了」
58 5	蘇悉地經問答	一冊	（本奥書慈円識語）「承元四年二月廿四日記之、求学小僧慈一記、如此口決、皆一向假名書 <small>二</small> 如常假言書之、若見之人、勿令嘲哂、是、一向為心得易也」 *「統天台宗全書 密教2」翻刻所収
94 1	秘經抄	一帖	（本奥書慈円識語）「覺大師門人末学沙門金剛佛子慈一」 「題等之趣、為学者談義、尤以大切、仍書之」 「承元四年二月廿七日夜、於燈下書今之愚案了、属寢訖、此夜夢云、上皇与佛子、互成夫妻之儀、其籠頗過分之趣也、夢之中、今經抄記、若叶正意坎、夢之間、巨細不能委記、併皆、成就之相也、一々事、云心地呪、云三種悉地真言、普符合之由、覺悟而驚了。欣感銘肝坎、仍、聊以記之」 （成源書寫識語）「以上裏書、同廿五日書了、同交合了、成源」寛元四年成源識語 *「統天台宗全書 密教3」翻刻所収
85 6	北斗等入三摩地	二冊	（外題）秘／北斗等入三摩地 <small>私二</small> （本奥書成源書寫識語）「御本云／承元四年五月廿二日、以西之御所御本、於吉水隔屋書寫了、交合了、成一」
69 9	法花私新記	一冊	（外題）法花私新記 <small>初心行者秘本也</small> （内題）法花 <small>私行</small> （本奥書慈円識語）「承元四年八月廿日草之、未入壇初行人、為令修之也、于時、聖增阿、授与了、／金剛佛子慈一記」
69 13	法花 <small>別帖</small> （*前掲）	一冊	（本奥書成源書寫識語）「承元四年九月二十九日、於西山御所、法花三帖給了、即出裏了、同十月十四日、於岡崎房書寫了、自去四日、天变御祈熾盛光法伴僧勤仕之間、連々忽々書寫遅々也、求法佛子成源」

74 9	佛眼法	一卷	(本文中慈賢識語「承元五年正月下旬比、聊記之、依事次也、慈賢注也」)
108 11	十禪師講式	一卷	(本奥書慈賢識語「建曆元年九月廿日、治定遂記、未再治之時、以清範令書之、其後、以成源律師、取捨添削事、令書入之、同十月十二日、一向為自行書改表白、悉治定了、金剛佛子、記」*正和二年慈道、寛正六年康玄、永正十五年公禪書寫。
木箱 2 19	金私 七佛藥師日記	一冊	(本奥書慈賢慈門問答記)「建曆元年十一月十六日、於天王寺奉問、結縁灌頂之時、道俗加持 ^ニ 用何作法乎(下略)」 (本奥書慈賢識語「建仁二年三月二日、於白川御房、私為用意記之、皆是師々相承秘說也、(中略)真如金剛慈賢」)
66 5	七佛藥師日記	三帖之 内(1)	(外題)三条坊門殿 ^{天乘院} ／七佛藥師日記 ^{建曆十一年} (本奥書宗宴識語「建曆二年六月廿九日、金剛佛子宗宴」)*寛元四年澄宴書寫。
木箱 1 8 (3)	地神供日記 ^{西山}	一通	(外題)慈賢 ^{御筆} ／地神供日記 ^{西山} (内題)「建曆三年二月十二日閑院殿安鎮法日記」
73 6	尊勝法日記	一卷	(外題)賀陽院／尊勝法日記 ^{建曆三年} (内題)「建曆三年十二月一日、高陽院殿被修尊勝法日記」 (本奥書慈賢識語「建保二年正月廿九日、粗記之、慈賢」)*延慶二年慈源書寫。
69 5	法花法日記	一帖	(外題)法花法日記 ^{中堂} (冒頭)「建保二年正月十六日、於根本中堂、被修法花法」 ^{院御所也}
69 4	法花法行法抄	一帖	(外題)法花法行法抄也 (奥書書寫識語「建保二年正月廿七日、賜御本書之了、□□」)
史料編纂所藏(慈惠大師講式)		一卷	(奥書慈賢識語「慈門、忍不見昔之心、超默見今之思、仍述大師讚嘆之詞、顯弟子懷意之志也、建保二年七月、以成源律師令上書也、去年草也」)*識語慈門自筆。
86 7	水天供日記	一通	(外題)水天供日記 ^{辨題} 建保三—六月九日 (奥書慈賢識語「持誦不同說、大旨如此狀、又可有広略、為後粗記之、慈賢法之」)*慈賢筆。
61 10	慈鎮和尚御相承目錄	一卷	(本奥書慈賢識語「建保四年五月六日、於康樂寺草庵、以和尚御本書寫之」 「此目六者、我大師和尚御伝受之録也、慈賢法師、奉伝受本書事、不輒之間、略六之内、所奉説伝之書、纔以半分也、其之内、奉受内題許書、多之、何況、尽了究卷事、甚以為難、仍、為弟子伝之事、可黙止者哉、依之、和尚、被仰了、自今以後、以我伝受録 ^{付汝} 、以之為伝受、任心授之披之、仍、仍為備龜鏡、敬以奉寫之、南无金剛薩埵、助成印可給」) (本奥書道玄識語 ^{御本云} 「文永三年六月中旬、於無動寺松林房、以故康樂寺座主(慈賢)自筆之本、書寫之、彼本雖令伝領、為加隨身私抄、別所寫也、金剛佛子道」)*文和四年嚴靖書寫。
67 1	葉師	一冊	(本文冒頭朱注)「葉師行法表白之可如此 ^上 書行也」 (本文中朱注)「以下皆御筆也、但、大タラニハ祐真手跡也」 (本奥書識語「建保四年十月十五日、從前大僧正始伝法、先是、去九月二日、奉受十八契印、同廿四日始初行行法 ^{三時畢} 、自六月廿七日加行 ^ヲ 始也、次第如此、可記置之由、師被示、仍記之」此日記、伝受之日記、如此可記とて書行也、佛子道覺) (奥書書寫識語「建長四年九月七日賜之、同九日書寫了、佛子尊助」) (異筆識語「此則、慈鎮和尚等筆也、故宮御記有之」)

函号	書名	数量	外題・内題（書名と異なる場合）・奥書・識語
86 6	地天供	一帖	〔内題〕「地天供 <small>私</small> 」 〔本奥書慈賢識語〕「建保四年十一月十六日、如形記之、来十九日、新御所宮御移徙之時、以祐真阿闍梨為令修之也」〔于時、以御筆草本写之、〃慈賢法師〕
89 2	諸尊集	一帖	〔内題〕「諸尊集」 〔本奥書慈賢識語〕「建保五年五月廿一日、於吉水御所傳之給了、先、可許給此帖之由、内々申入、即以慈賢僧都被申、宮御方、尤可然由、御返事之後、重和尚仰云、件本、求佛上人所書写也、速召彼本、可給之云々、仍、廿日給御教書、同廿一日、所伝之也、〃金剛佛子權律師法橋上人位 <small>内患</small> 」 〔道覚識語〕「寛喜二年八月九日、円憲僧都頓減畢、其後、覚位上人返取此本、所令進也、惠契 <small>トホ</small> 、彼聖人之本名也、〃西山隱士道覚記之」
84 4	如法北斗法	一冊	〔内題〕自建保六年五月十五日、於水無瀬殿被始修如法北斗御修法日記 〔本奥書成源識語〕「隨思出、大旨記之、成源」〔此記開白結願、惣礼并御加持五大願等事、後日見之、所令記定有之坎、記落候坎〕
69 7	五智	一冊	〔本文中慈円識語〕「建保六年七月七日八日兩日之間、書之訖、同五日朝、聊有発心之旨、而六日巳時許、自天王寺告送云、四日辰時、御塔上第三層五層等、鷹飛來之後、或巽方、或東方去云々（下略）」 〔本奥書〕「嘉祿元年卯月廿四日午尅許、書写之了、一交了云々」 〔成源書写識語〕「延応二年五月四日、以飯室御書写本書写了、楚忽馳筆、閑可書改也、成源」
54 4	深秘私記	一冊	〔本奥書〕「已上、後日書之、建保六年十二月」
62 2	護摩儀軌	一帖	〔尾題〕金剛頂瑜伽護摩儀軌 〔奥書書写識語〕「建保七年二月十八日、於高陽院西对 <small>五壇法、第十三日</small> 、以無動寺檢校法印御本 <small>豐林寺筆寫本、百光藏本也</small> 奉写了、願以書功力、自他生極樂而已」〔翌日校了〕
86 9	水観草	一帖	〔外題〕水観草 <small>可有再給、清書之本</small> 〔本奥書慈円識語〕「建保七年後二月六日書之、〃金剛佛子慈一記」 〔奥書書写識語〕「仁治元年七月、以飯室御房御書写本書了、交了、真言私記御書也」
60 12	本尊積問答	一冊	〔本文中慈円識語〕「承久二年正月六日、於無動寺大乘院書之了、金剛佛子慈一」 〔奥書慈嚴識語〕「元亨二年七月廿日、以和尚御自筆本、跪書写之訖、〃清淨金剛慈嚴記之」
〔愚管抄〕卷二			〔慈円識語〕「承久二年十月之此、記レシ之ヲ了ル、後見之人、此趣ニテ可ニ書統ク也、最略尤モ大切坎、於ニ別記一者、不能ニ、外見 <small>スル</small> 」
89 3	道場観	一冊	〔外題〕甚深至極抄〃道場観 <small>一切行法</small> 〔本奥書慈円識語〕「承久四年三月廿日、書之了、書始之後、經多年了、〃金剛佛子、〃」 〔成源書写識語〕「以尊師御本書写了、〃成源」〔寛元四年後四月十七日、交他本畢、成源〕
三千院円融藏（六道釈）			〔本奥書慈円識語〕「承久四年三月廿五日草之了、同四月十一日清書了、執筆成源僧都、〃願以此功德為一仏土縁、〃金剛佛子慈一」

69 7	五智（*前掲）							
43 2	十二真言王布字事	一冊						
73 3	不空絹索事	一冊						
70 5	仁王經法	一冊						
30 15	道場観	一冊						
92 1	唯独帖	一冊						
98 9	御修法条々用心事	一冊						
98 13	授女人行法	一帖						

〔外題〕葉王菩薩事／授女人行法先師御作（内題）略念誦次第
 〔慈円識語〕「承久四年六月廿二日、給之、持參宜秋門女院、奉授了、山中殿同聴、阿弥陀以下要尊印明、同奉授了」
 〔道覚識語〕「石是、先師御作也、向後以之可授女人坎（通釋）（記）」

〔外題〕御修法条々用心事私
 〔本奥書慈円識語〕「貞応元年季中秋之比、如形抄記之了、不可及外見、只為常隨同法等也、在御判」
 〔本奥書公澄等書写識語〕「弘長元年八月廿二日、一交了」
 〔建治二年十一月十二日、於原禪房申出御本書写校合了、／金剛佛子公一〕正和三年良雅書写。

〔外題〕唯独帖抄奥入抄之
 〔本奥書慈円識語〕「貞応二年九月廿九日、抄之了、御判」
 〔奥書公澄書写識語〕「弘安三年正月十三日、於岡崎禪房、以御自筆正本、馳筆了、宿因有幸、忝拜此之御抄、可秘々々、門流最秘也、至極甘要也、／金剛佛子公澄、／同校合了」

〔外題〕道場観抄私／龜壳物也
 〔本奥書慈円識語〕「貞応二一廿三日、於小嶋御房抄之、／御判」
 〔奥書公澄書写識語〕「弘安三年二月七日、於北嵯峨原禪室、以正本馳筆了、校合了、／金剛佛子（公澄）」

〔本奥書慈賢識語〕「貞応三年四月十二日、於比假日吉坂本大和庄宿所書之、先年比、粗伺師説、檢旧記、抄之、而之間、近年、国土不静、王法衰微時、欲修此法、仍、有増事、今重所再治抄記也、寛治以後、山門不修此法、猶今者、一向、東寺修之由、王臣共被存坎、尤不便々々、欲興行之、山王助成給云々、／金剛慈賢記之」

〔本奥書慈円識語〕「嘉祿元年四月廿四日書写了、在御判」

〔表紙識語〕「尽理尽文加料簡了、抄之」

〔本奥書慈円識語〕「本云／嘉祿元年四月廿四日書写了、在御判、一交了」
 〔成源書写識語〕「以御本書写了、／成源」

〔本奥書書写識語〕「嘉祿元年卯月廿四日午尅許、書写了」

成立年代未詳慈円著作聖教

函号	書名	数量	外題・内題（書名と異なる場合）・奥書・識語
60 6	本末究竟深入鈔第三・四	二冊	第三（外題）本末究竟深入鈔／第三 <small>（先起）</small> （奥書成源識語「寛元四 <small>（マ）</small> 月五月十一日書改了、即交合了、成源、／同裏書等悉交合了」） 第四（外題）本末究竟深入鈔／第四 <small>（從本條因）</small> （奥書成源識語「寛元四年五月十五日書改了、即交合了、成源」）
60 11	真言宗私	一帖	（外題）真言宗 <small>（私）</small> ／真言御問答 （奥書慈源識語「元亨二年十一月十四日、以和尚御自筆本拜書写之訖、／秘密大乘小学僧慈嚴」）
60 14	本末抄	一帖	（包紙外題）自行本末抄（内題） <input type="checkbox"/> 行抄 <small>（目）</small> （本奥書慈円識語）「為初心行者、抄之了、但、輒不可及外見而已／金剛佛子（花押）」
75 7	本尊緣起	一冊	（奥書・識語無し）*多賀宗隼紹介翻刻。
91 10	入三摩地抄	一冊	（外題下）未再治（内題）入三摩地事 <small>（可見御抄）</small> （表紙見返識語）「入三摩地事、端 <small>（ニ）</small> 有前抄、奥 <small>（ニ）</small> 有後抄、共以未再治也」 （奥書公澄書写識語「弘安三年二月十七日、於西郊草庵、染筆了、同校合了、／公澄」）
92 2	肝要抄	一冊	（外題） <small>（肝要抄 敢了不定）</small> （外題中央）密號集 （奥書公澄書写識語「弘安三年二月六日、於西郊書写校合了、／金剛弟子公澄」）
92 3	肝要抄	一冊	（外題下） <small>（分別）</small> （内題）抄 （奥書公澄書写識語「弘安三年二月八日、於北嵯峨房、以正本書写校合了、／金剛弟子公澄」）
97 3	諸尊法卷数支度記	一冊	*慈円の修した御修法等の支度・卷数集成